



イベント  
レポート  
I

美国・美しい海づくり協議会

イベントレポート1……………美国・美しい海づくり協議会  
なぎさのレンピ……………焼き昆布とカボチャの春巻き  
イベントレポート2……………びわこ環境保全活動組織  
ホットニュース……………全国青年・女性漁業者交流大会

10月17日の北海道。東海大学札幌キャンパスの講堂で、「美国(びくに)・美しい海づくり協議会」の神(じん)代表が、学生たちに藻場の保全活動について語ってくれた。今回のイベントは、漁師たちが行う保全活動を講義と実習によって知ってもらい、体験してもらおうという企画。同大学の生物学部海洋生物学科の南秀樹教授をはじめとする先生方と専門家の大塚英治さんの協力により実現した。



\* \* \* \* \*

神さんたちの活動場所は北海道積丹半島の突端、年間100万人が訪れるという観光地。活動内容は、ホソメコンブを主とする海藻の森“藻場”を回復すること。現在はごく浅い海域(水深1~2m)にわずかにコンブが生えているのみで、いわゆる磯焼けの海が広がっている。

「今から25年ほど前は水深4~5mの範囲にまでコンブが繁茂していて、船外機にコンブがからまるほどでした。キタムラサキウニはところどころにいる程度で、今とは別世界の観がありました。」

「このウニがコンブを食べ始めると、2、3日であっという間に無くなってしまいます。このウニは、8月が過ぎ

9月に入って産卵が終わると急に食欲が増し、びっくりする位の量のコンブを食べます。」

今起きている磯焼けの原因は、コンブを食べるウニの数が、衰退してしまったコンブの量に対して多すぎることが大きな要因と考えられている。そこで、神さんたちは、ウニの量を減らす除去活動を行いながら、かつてのコンブ場を再生することにしたわけである。ただ、ウニの除去活動を行うには、漁師だけでは足りない。後継者も不足している。そこで一般のダイバーの協力を得ることを思いついた。



「美国の海は“積丹ブルー”と呼ばれ、青く透明な海が売りのダイビングスポットでもあります。また、札幌から車で2時間程度の圏内にあり、一般のダイバーが多く訪れます。そんな一般ダイバーの方から、藻場が減って魚があまり見られなくなったね、という声を聞き

	活動組織名	美国・美しい海づくり協議会
	都道府県	北海道
	地域協議会	北海道環境・生態系保全対策協議会
	協定市町村	積丹町
	構成員数	71名
	対象資源	藻場
活動内容	母藻の設置、食害生物の除去、栄養塩類の供給	

ました。我々漁師も藻場を回復しなければならないと  
考えていましたので、両者の思惑が一致したわけ  
です。」

しかし、ボランティアの保全活動とはいえ、一般の人  
がウニを獲ることができるのだろうか。

「現在 60 名程の一般ダイバーさんに協力してもら  
っていますが、彼らが活動するときは、特別採捕許可  
証という書類を行政から発行してもらい、活動してもら  
っています。ウニの除去だけでなく、ウニや海藻の生育  
状況のモニタリングも手伝ってもらっています。」

このような活動の甲斐あって、ウニの除去を実施し  
た海域では、全ての水深でホソメコンブの着生が確認  
され、漁師も一般ダイバーも手応えを感じているという。

\* \* \* \* \*

日を改めて、10月27日。講義で予備知識を蓄え  
た学生たちは、ホソメコンブの母藻(成熟した海藻)を  
海中に設置する作業を体験した。東積丹漁協に集合  
した学生たちは、大塚さんの指導のもと、コップに入れ  
たコンブから種(遊走子と呼ぶ)が出る様子を肉眼と  
顕微鏡で観察し、その後、神代表の指導のもと、ワイ  
ヤーに一定間隔にコンブを取り付け、あらかじめウニを  
除去しておいた海域に船から投入した。

幸運にも、この日は荒天続きの中の東の間の晴天と

凧(なぎ)で、活動にはもってこいの日となった。ただ、  
神さんたち漁師にとって、このような日は大事な出漁  
日でもある。神さんたちは、早朝からアワビ漁に出て、  
それから保全活動の実習を行っている。神さんたちの  
保全活動にける熱意に脱帽である。そして、学生た  
ちに向けられた神さんたちの熱いまなざしに、次世代  
を担う若者たちへの期待感のようなものが感じられた。



学生たちは2日間という短期間ではあったが、神さ  
んたち漁師の話を直に聞き、漁師とともに海に出た。  
実体験から得た知識は、きっと何のものにも代えがたい。

神さんは最後にこう言ってくれた。「漁業に興味があ  
ったら美国に、私のところに来てください。」

短い学生生活、このような身近にあるフィールドに  
積極的に出かけてほしい、そして多くの漁師と接して、  
彼らの想いを吸収してほしい、と思う。

(JF 全漁連 関根寛)

## なぎさの レシピ

### ♪焼き昆布とカボチャの春巻き♪ (日高地区漁協女性部連絡協議会 川崎尚子さんの作品)

食物繊維、ミネラル、ビタミン、カルシウムが豊富な昆布とβカロチンを含むカボチャを仲良く組み合わせました。パリパリとした歯ごたえ、中はホコホコなカボチャと香ばしい焼き昆布の味が絶妙です。栄養豊富で、おやつとしてもおいしく召し上がれます。

#### 材料(4人分)

- ・昆布(乾物).....15cm
- ・かぼちゃ.....1/8 個
- ・春巻きの皮.....4 枚
- ・揚げ油.....適量

#### 【作り方】

1. カボチャは厚さ5cm、長さ6cmに切る。
2. 熱したフライパンに昆布に昆布を入れ、こんがりするまで箸で焼き煎る。(油は使用しない)
3. 焼いた昆布はミキサーで粗粉末にする。
4. 春巻きの皮にカボチャを乗せ、粉末にした昆布を挟み、更にカボチャを乗せて少しゆとりを持って巻き180℃の油でゆっくり揚げる。
5. 斜めに切ってお皿に盛り付けて出来上がり。

- ☆作り方のポイント
- ・春巻きの皮が破けないように少しゆとりを持って巻くこと
  - ・油の温度調整(180℃に保つ)を上手く行うこと。



(編集: JF 全漁連 天田明音)





## イベント リポート II

### びわこ環境保全活動組

「ワーッ！」お正月気分がようやく抜けた1月16日、びわ湖につながる内湖(ないこ)、西ノ湖の湖上に、地元島小学校の3年生児童20人の歓声があがった。地元漁師と子供たちがふれあい、びわ湖や西ノ湖の漁業とヨシ原の環境とのつながりを学ぶ課外学習での、舟上学習でのシーンだ。

晴れ上がった空の下、透き通った空気は気持ちが良いが、じっとしているとやっぱりじんわりと寒さが身に凍みる。そんな朝、子供たちがバスで西ノ湖のほとりに集合した。近江八幡漁協所属の漁師・東春夫さんらが出迎える。

びわ湖の漁師さんや近江八幡漁協などでつくる「びわこ環境保全活動組織」が主催した、地元の島小学



校との環境学習・交流会である。

さっそく、東さんの周りに子供たちの輪ができる。船着き場の周辺には、東さんの漁具がならべてある。

「これは魚を捕るカゴやね。フナでもウナギでもなんでも入る。ニゴロブナ分かるかな？ 鮎ずし食べたことあるやろ？ まだないかな？」

東さんが子供たちに語りかける。堅苦しい挨拶もけれんもない、いきなり子供たちの心にとびこむような優

しいおじいちゃんの“技”だ。少し緊張していた子供たちの心をつかんで、一瞬にしておじいちゃんと孫のふれあいの雰囲気がかもしだされる。

次に、大きなシジミのような真珠貝“イケチョウガイ”、がならべられる。「真珠はわかるな？ かあちゃんが首から下げとるやろ？ この貝が真珠を作ってくれるんや。」

「魚も貝も、びわ湖の環境がちゃんとしてないと捕れないんよ。ヨシ原にコイやフナの赤ちゃんが隠れて育つ。ヨシは水もきれいにしてくれる。ホテイアオイという浮草やゴミが増えすぎると、ヨシが弱る。枯れたホテイアオイは水を汚してしまう。魚も貝も生きていけないようになる。だからワシらで掃除をしとるんやね。」

東さんの経験と実感から出てくる言葉に飾りや誇張はない。真実であることを直感で感じている子供たちの目は、真剣だ。東さんの言葉が子供たちの心にしみわたって吸収されていく様子が、傍らで見ていて手に取るようにわかる。



「さあ、舟に乗るよー。」

東さんの言葉に、子供達の表情に「待ってましたっ！」感が表れる。

揺れる舟に「キャーッ！」子供たちがにわかに活気づく。舟が出航し、スピードがあがると子供たちのテンションがあがった。沖合に設置された「えり」に案内される。定置網漁業である。本来、フナやコイ、モロコなどを狙うものだが、ブルーギルやブラックバスなどの外来魚が多くとれてしまうという。うっそうとした岸辺のヨシ

	活動組織名	びわこ環境保全活動組織
	都道府県	滋賀県
	地域協議会	滋賀県環境・生態系保全地域協議会
	協定市町村	近江八幡市
	構成員数	157名
	対象資源	ヨシ帯
活動内容	競合植物の管理、浮遊・堆積物の除去	

原にむかう。今の季節は面影もないが、夏にはホテアオイが湖面を覆い尽くし、ヨシ原に押し寄せるのだそう。浮草が茂って荒れたヨシ帯は、本来の魚のゆりかごや水質浄化の機能を十分に果たさない。だから、びわ湖の漁師たちは、定期的にヨシと競合する浮草を除去したり、湖面を漂い、ヨシ原に漂着するゴミを取り除く活動をしている。漁業という生業と自然が、人の手によってつながっている、いわば“里湖(さとうみ)”だ。

\* \* \* \* \*

乗舟体験を終えた一行は、島小学校に向かう。続いて教室での学習だ。子供たちは教室にもどり、東さんをはじめ大人たちはいったん校長先生のお部屋に案内される。小学校は子供たちと先生たちのフィールドであり、独特の懐かしい空気があるが、外から来た大人たちにとってはアウェイ。何となく緊張する。しかし、優しい校長先生のニコニコ笑顔と、若い女性の先生からいただいたお茶で癒され、うちとけた。さっきの湖のほりでの立場がまるで逆転したようだ。

3年生の子供たちの教室で、学習会がはじまった。東さんが先生となって、びわ湖の漁業と生物の授業が行われる。ヨシノボリ、ゲンゴロウブナ、ニゴイ……。東さんの説明が続く。

「びわ湖で一番大きい魚な何ですか？」子供らしい質問が出た。

「ビワコオオナマズやね。1メートルにもなるかね。」と東さん。地元のうみに、そんなに大きな魚がいるとは、子供たちも驚いたようだ。



続いて、スタッフの三枝さん(滋賀県)から、ヨシ帯やホテアオイの管理など、地元漁師や漁協、近江八幡市、滋賀県が一体となって環境保全に取り組んでいることが紹介され、最後に、専門家の安藤亘さんによる「ヨシ帯と滋賀県の漁業クイズ」コーナーがはじまった。

「びわ湖のお魚の種類は何種類かな？」

「50種類！」

アンケートでは、「大人になったらびわ湖で漁師をやりたい！」子供が多くいた。その気持ちがうれしい。大人になってどんな仕事についても、きっとびわ湖の視点から社会を見てくれることだろう。

(JF 全漁連 田中要範)

## ホット ニュース

### 「第18回全国青年・女性漁業者交流大会にて

環境・生態系保全対策に取り組む活動グループが発表しました！」

「全国青年・女性漁業者交流大会」は、全国の青年・女性漁業者が、日頃の研究や活動の成果を発表し、参加者間の情報共有によって、水産業・漁村の発展と活性化に資することを目的として、JF

全漁連が主催となって毎年開催しているものです。

今年度、2月28日に開催された第18回大会では、35の漁協やNPOなどの団体に発表いただき、このうち、「環境・生態系保全対策」にとりくむ3つの活動グループの発表がありました。詳細については、今後以下のウェブページで公開の予定ですので、ご参照ください。

<発表タイトル・発表者>

「挑戦！われらの海を豊かな海へ ～藻場再生の道しるべ～」 新立雄一郎さん 九十九島漁協鹿町青壮年部（長崎県）

「漁場環境保全への取り組み - 未来に繋ぐ水見の海 -」 砂山哲一さん 水見漁協青年部（富山県）

「藻場復活！！ ～ウニ除去を行って～」 大戸起久男さん 野母崎三和漁協青年部高浜地区（長崎県）

<資料参照先>

<http://www.zengyoren.or.jp/ninaite/kouryu/>（「全国青年・女性漁業者交流大会資料」で検索してください。）



<お問い合わせ> JF 全漁連 漁政部 環境・生態系チーム

Mail : k-support@zengyoren.jf.net.ne.jp TEL:03-3294-9616 FAX:03-3294-9658